

---

# 金魚

鈴木イチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金魚

### 【ZPDF】

N1658F

### 【作者名】

鈴木イチ

### 【あらすじ】

美しい肉食魚である『彼女』の餌として買ってきた、幼い金魚のディーと接しているうちに、冬来の胸にはいつしか、正体不明の焦燥感が宿るようになつていた。

餌として買つてきたつもりだった。当初は。名を付けていない『彼女』の、餌として。

なぜか今は、その餌に餌を『えて生かしてしまつて』いる。

（ヤキが回つたもんだな、俺も）

そう嘆息して、微苦笑した。説明の付けられない自分の行動は、正体不明の凶暴な焦燥感にあつた。

今は瘦せつぽっちの幼い家畜が、丸々太つて見るからに食べ頃になるまでの我慢だと思って、曖昧模糊な衝動を意識の片隅に追いや、日々を邁進している。

こいつが真つ赤な血を振り撒いて、内臓を撒き散らしながらガツガツと食われてしまえば、胸の内に巢食う暗い不安も消滅するに違いない。そう無理矢理決め付けて、冬来は騒ぎ始めた神経を強引に抑圧した。

「腹減つたあー。プリン食べたい、プリン！」

「うつせーチビ。静かにしろ」

冬来がピシリと一喝すると、目に痛い紅い衣を纏つた家畜は、ううつ、と意味の無い音を漏らして沈黙した。しかし不満そうに頬を膨らませており、不機嫌オーラを周囲にばら撒くことだけは忘れていない。生意気なヤツだ。

「そんな事言つていいのかよー。早く俺太らせないと賞味期限きちまうだろーが。そんなことになつたら勿体無いっしょ？ 俺も不幸だし」

「家畜が人間に意見するなんざ、世も末だな」

新世纪がはじまつたばかりなのに、冬来はそう思わずにはいられなかつた。それにしてもよく回る口である。買つてきた当時の姿からは想像できないほどに。

少々うんざりしながら、冬来は買ってきたばかりのプリンを家畜に向かつて放り投げた。

「それ食つたら、また寝ちまえ。起きると煩くてかなわねえ」

「ほーい」

早速包みを開けたヤツは、もぐもぐと忙しそうに口を動かしながら返事をする。出来の悪い弟でも出来た気分だった。

冬来は昔から生き物を沢山飼っている。公言はしていないものの、実は動物好きだったのだ。馬にしろ犬にしろ猫にしろ、血統書付きの上等なものばかりで、それは魚に至っても例外ではなかつた。龍の化身としても名高い、アジアアロワナ。その中でも一際高貴な印象を受ける金龍と言つ、一旦見たら忘れられそうにない程の美しい姿が、一室の壁面を打ち抜いて改築された大型水槽の中にある。最近、店で見かけて即買いしてしまつた代物なので、まだ名は付けていない。しかし雌ということもあり、冬来はただ単に『彼女』と呼んでいた。

肉食魚である『彼女』のため、毎日大量の小魚が必要になる。一口ワナ用に配合されたドライフードでも事足りるのだが、しかし冬来は生きた小魚が『彼女』の水槽に投入され、断末魔の悲鳴を発しながら必死の逃亡の末に活餌にされる様子を観察するのを好んだ。餌が見目美しい金魚だつたりすると非の打ち所が無い程にゾクゾクする。友人に言わせると「とんだ悪趣味」らしいのだが、好きなものは仕方がない。

そうやって貰い占められた金魚の中に、ディーは居た。

冬来宅に送り届けられた金魚は、一度『彼女』とは別の大好きなプールに入れられる。そこで餌になるまでの死の順番を待つわけなのだが、ある日冬来が『彼女』の餌を餌別するために金魚用のプールを訪れたところ、一匹だけプカプカと浮いていた赤い塊があつた。

なぜ死骸が放置されているのかと腹立だしくなり、すぐにその金魚を捨てようとした。しかし、水から出して暫くすると、驚く事にその金魚はパチリと目を開けたのだった。

「なんだよー。せっかく気持ちよく昼寝してんのに、邪魔すんなよなあ。寝る子は育つんだぜ？ もし今の邪魔で俺の味が落ちたら、あんた責任とつてくれんのかよ」

「……ああ？」

肌に纏っていたひらひらの紅い布は濡れそぼり、金糸に近い髪の毛もこじなつて大量の雫を床に落としている。しかし家畜にしては随分と整った顔立ちだ。本来金魚は観賞魚であるから、姿かたちが美しいのは当然かも知れないが、こいつは他の金魚より群を抜いていると思った。しかし四肢は痩せ細つており、家畜としての食指はとても沸かない。

「死んでたんじゃねえのか、貴様」

「見れば解るでしょ、ちゃんと生きてるよー。ビヨーキもないし、もうすぐ食べ頃、ピチピチの可愛い金魚ちゃんだつ」

えへん、と胸を張つて、家畜は人懐こく笑つた。

「その割には痩せすぎなんじゃねーの。喰われたいならもつと太れ」「わかつてゐよそんなこと。俺は元々太れない体质なのつ。これでも頑張つてんだかんね！」

先刻まで二口一口していた表情を途端に崩し、今度はあからさまに不機嫌になつてゐる。喜怒哀楽の激しいヤツだと思つた。仕方が無いのでその日から、冬来はそいつをプールから連れ出し、餌として相応しく熟すまで特別に面倒を見てやることにした。

家畜は、ペツトショップにいた頃は係の人間から「ディー」と呼ばれていたそのなので、自分もディーと認識することにした。どうせ名を呼ぶ事など無く『彼女』の腹に直行だろうから、無駄な知識かも知れなかつたけれど。

「ねね、冬来。もうそろそろ俺、食べ頃じゃない？」

ディーは、冬来と顔を合わせるたびに同じ質問をした。遂には一日に一回は決して欠かさない、恒例行事のよつなものになつてゐた。

「さあな

「なんだよ、その気の無い返事はつ。俺にとつちや餌になるのは一

世一代の晴れ舞台なんだぞ！ すつゝくへ誇らしい事なんだぞ！ もつと真剣に俺を見てつてばつ

なんとなく気が乗らなかつたので適当に流したら、ぎやーぎやーと頬く付き纏われたので、仕方なく冬来は紅い服の襟足を鷲掴み、人間の子供程度の大きさをしたディーを簡易プールから摘み出した。

「どう？」

「どうつわれても、昨日と大して変わつてねーよ」

「そつかなあ。今日こやはと思つたんだけどなあ……」

「しょぼん、と肩を落として、ディーは唇を突き出した。

「でも、ま。いつか。頑張つてもつと美味しい餌になる。」 うやつて冬来とダべるのも面白いしさ。時期ももうちよつどだと思つこふむふむ、と勝手に自己完結して落ち着いて、ディーは再度自らの決心を固めるように両の拳を握つた。

「……」

確かに、初見よりは肌の色も唇の艶も健康的に色づいている。痩せすぎだつた体型も標準に戻り、そろそろ『彼女』に『えても良い頃かもしけない。

だが、ディーと接する時間が増えれば増えるだけ、冬来の心には決然としない蟠りみみたいなものが大きくなつていつた。少し前から感じていた、違和感のよつた焦燥である。

「……なあ」

「なに」

大きなどんぐり眼を上目遣いにして、ディーは冬来を見上げた。

「お前は、餌になるつてことがどんなことだか、解つてんのか？」

「？」

冬来の問いを、ディーは不思議そうに受信した。

「うん、解つてるよ。死ぬつてことでしょ？」

「……だつたら、なんで……？」

冬来はとても苦しそうな表情をしている。なぜ冬来がそんなに辛

そうなのか解らなくて、ディーはぴょこんと首を傾げた。

「それが、どうかしたの？ いつも言つてると思つけど、俺たち肉食魚用の餌として育てられた金魚は、餌になるのを常に夢見てるんだよ。だってそのために生まれてきたんだし。少しでも美味しい餌になれるように、『ご飯もらつて、運動して、お昼寝して。美味しい食べてももらえるよう』って、いつもそれだけを考えてるんだよ？」

「でも、食べられたら痛いだろうよ」

「そりゃあねー。食い千切られるわけだから。でも、痛みよりも幸せの方がおつきいよ。きっと、断然おつきい」

「そんなの……！」

納得いかない、とばかりに声を荒げた冬来に、ディーは冷静に対応した。その落ち着きっぷりに、冬来はますます神経を逆撫でられてしまう。攻撃的な感情が先行し、語尾が乱暴になるのを止められない。

「食べられたら……死んだら、もう一度とプリンも食べられねーし、俺とも喋れなくなるし、そこで全てが終わるんだぜ？ そういう運命を不幸だとは思わねーのかよ」

「プリンは甘くて大好きだし、冬来も面白いから大好きだよ。でも、俺は餌としての本文をまつとうできない人生なんか、想像するのもヤだ。そんな不幸な出来事、ほかにはない」

ディーの聲音は竹を割つたようにきつぱりしていた。

駄目だ。これでは永久に平行線だ。人間と家畜の価値観は、これほどまでに異なつたものなのだろうか。

冬来自身は、誰かに食われる事を夢見るなど、言語道断で勘弁だつた。正常な神経ではないと思う。自分が殺されて身体が食われる想像なんて、1秒でも考えたくない。おぞましさで虫唾が走る。

「……俺は、」

俺は、一体何がしたいのだろうか。

数日前から如実になつてきた、無視できない感情。とても自己中

心的な、自己顯示欲の塊。

ディーを、殺したくないと思つてしまつた、自分。

(何故だ……?)

暇さえあれば寝ているけれど、声を掛けたり頬を擦つたりして起すと、眩しいばかりの満面の笑顔と、ぐるぐると忙しなく動く瞳で、煩いほどに託なく自分に話し掛けてくれる『ディー』。

ディー本人もこの生活に満足しているようだし、ずっとこのままでいられればいいと思っていた。

だけど、やっぱ『ディー』は家畜で。

自分の生活よりも、『彼女』に食われることを強く望んでいて。

「……だったら、……」

早く食われちまえばいいんだお前なんか、といつもは、最後まで発される事は無かつた。

「……早く、食われるよひになるといこな」

「おー!」

嬉しそうに返答する『ディー』を正面から見ていられなくなつて、冬来はふいと視線をずらした。

ぼんやりと、脳裏の片隅に思惟が浮かぶ。

(他のヤツが食う位なら、俺が……)

その決意は、まだ俄然柔らかくて、定まらないものだつたけれど。そういう選択肢が芽生えたことに、冬来は思いのほか満足して、そつと部屋から退出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1658f/>

---

金魚

2010年10月8日15時08分発行